令和六年度卒業証書授与式　式辞

蒼天にそびえる霊峰は、毎年冬になると凛として銀の衣を纏い、この地域を見守りながら、私たちの住む場所にも冷たい吐息を吹きかけます。この養正が丘でも、つい先日までは、凍てつく吐息が駆け巡り、痩せた枝が震え、新しい季節の到来を待ち望んでいるかのようでした。今は、少しずつ水が温かみ、小鳥はさえずり、草木がざわつきはじめています。春の足音が感じられる今日の佳き日に、愛媛県議会議員　塩出崇様、ＰＴＡ会長　吉實勇治様はじめ、多数の御来賓の皆様の御臨席を賜り、愛媛県立小松高等学校第 76 回卒業証書授与式が挙行できますことは、我々教職員一同の大きな喜びであり、深く感謝し、厚くお礼を申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与された 107 名の皆さん、卒業おめでとう。卒業生の御家族の皆様方には、入学以来、健やかな成長を願われての御慈愛に対しまして、深く敬意を表しますとともに、お子様が新たな船出の日を迎えられましたことに、心よりお喜び申し上げます。

皆さんの学年は、中学校時代から本校に入学してしばらくの間、新型コロナウィルス感染症拡大の影響で、様々な制約を受けてきました。新しい高校生活に期待をよせて入学していただいたにも関わらず、今までの価値観や経験が通用しない不条理な渦の中に巻き込まれ、やり場のない苛立ちや無力感にさいなまれた日々も少なくはなかったでしょう。そのような状況下でも、皆さんは、活気を取り戻すことをあきらめず、二年次、三年次と、先輩方のできなかった分まで、修学旅行や体育大会、小松高祭、部活動など次々と協力しながら成果を上げていきました。

多くの困難を乗り越えてきた皆さんですが、御家族、先生方、友人など身近な方々の支えがあってこそ今日の日を迎えられたことを忘れてはなりません。マザー・テレサの言葉にも「愛はまず手近なところから始まる。」とありますし、詩人ゲーテも「幸福は身近にあるものだ、それを見落とす者が多い。」と忠告しています。例えば、本校の生徒会誌「やまびこ八十六号」には、あなたたちがこれまで頼りにして来られた先生方からの道標が至る所に散りばめられています。伊藤史晴第三学年主任は、「「人に助けて」と言いにくい時代だからこそ、助けを求めることが大切なのです。」と説いています。杉田啓樹先生は、現代人が何事においても意味を求めることに対し、「先に意味を考えるのをやめる勇気も大切だ」と述べています。渡部慎司先生は、１＋１について、一人

一人の力が合わされば二以上の力になることもあると述べており、それは、ＡＩなどが教えることができない、人としての気持ちや思考があるからこそだということを強調しています。田所軍兵衛先生は、自分が 19 歳の時に中国に一人旅に出た経験から「若いうちの挑戦」が大切なことを確信しています。そして、宮本康平先生は、子どもと見るアンパンマンの中で、珍しくアンパンマンとバイキンマンが一つのベンチに座り一休みする平和な回に感銘を受け、今日一堂に会することが最後となる皆さんの晴れの日が、平和の中で、思い出深い良い一日になることを心から願っています。

　そのアンパンマンの作者やなせたかしさんは、すでにお亡くなりになっていますが、その思いは、「なんのために生まれて、なにをして生きるのか　こたえられないなんてそんなのはいやだ」に込められ、多くの人が成長する過程で知らず知らずのうちに精神的支えになっているような気がします。

　この小松高校での精神的支えは、やはり「積微力行」でしょう。毎日一日の始まりに篤志の坂を登り、小さな積み重ねを大切にしてこられた皆さんなら、これからも温かい心に巡り合い、助け合い、愛されながら、なんのために生まれなにをして生きるのか、そのこたえを見出すことができると信じています。

　最後になりましたが、卒業生、及び、御家族の皆様、重ね重ねおめでとうございます。卒業生の旅立ちの日に際し、それぞれが選んだ未来に向けて、自分を見失わず、力強く羽ばたき続けてほしいと心から願い、式辞といたします。

令和七年三月一日

愛媛県立小松高等学校

校長　　村井　浩昭